虫害・鳥獣害

長野市篠ノ井東横田の虫送り行事

全国各地にあった「虫送り」の行事も、現在は少なくなってきている。長野市篠ノ井では東横田や犬石地区に残っている。虫送りでは子どもたちが主役。毎年８月の初旬に行われている（写真は2007年(平成19)の様子）。

長野市川中島古森沢の「モグラ追い」

「もぐらホイ、ヘビもムカデも山いけホイ」と歌いながら、肥やし桶の縁を天秤棒でこすってキィーキィーという音をたてたり、ワラ打ち用の杵で地面をたたく。

現代的なかかし（左）と水田一面に張られた防鳥網

須坂市北部には「虫送」の地籍がある。

東横田では、最後に川に向かって害虫を燃やし落とす。

◆虫　害

江戸時代、虫害といえばイナゴ、とくにウンカによる蝗害が代表でした。1732年（享保17）に西日本で大発生し、それが享保飢饉の原因となったとさえいわれています。こうした虫害に対して、田に張った鯨油に虫を落としたり、夏場に村中の虫を集めて村の外に追い払う「虫送り」行事によって対処してきました。

戦後の高度経済成長期以降、化学的防虫剤が普及、ヘリコプターによる空中散布も実施され、虫たちは急速に姿を消してゆきました。

◆モグラと鳥害

モグラは一日に50mもの穴を掘り、畑を荒らし畔の水漏れの原因となります。農家は１月15日の小正月にモグラ追いの行事をしました。

実りの秋の訪れとともに、それをねらうスズメ・カラス・ムクドリが押し寄せます。農家では田んぼに案山子を立てて脅したり、最近では水田一面に防鳥網を張り、鳥の警戒音を出す電子防鳥機で対抗しています。

復元された塩尻市鉢伏山西側の猪土手

18世紀前半に築かれ、約1m盛り土した上に木柵を設け、イノシシばかりかシカの侵入を防いでいる。左は猪用の現代かかし。

◆獣害　イノシシ

江戸時代、イノシシ被害に対抗して猪垣や猪土手が築かれました。1793年（寛政5）上伊那郡与地村（伊那市）ほかの賞金規定では、大物が2朱、子どもの瓜坊は200文でした。明治以降、家畜の伝染病「豚コレラ」で減りましたが、狩猟の減少などによって再び生息域を広げています。

◆シカ（ニホンジカ）

長野県内に約6万頭生息しているといわれ、高山にも生息域が広がりました。人里での被害ばかりでなく、美ヶ原では牧牛を追い回して牧草を食べたり、南アルプス三伏峠（2,615m）付近のお花畑も食べ尽くされました。飯田下伊那地方のシカによる農業被害は平成18年度、県内全体の4割強にあたる2億3,600万円にも達しました。

◆クマとサル

クマは作物被害に加え、人を襲う被害も出ています。軽井沢町の別荘地ではゴミ箱をあさったり、人を恐れないクマが現れています。サルも人里に深刻な被害

人里への熊出没注意を呼びかける看板
（長野市若穂保科）

栄村秋山郷の熊猟（昭和30年代）
被害を与える動物は増えたが、狩猟人口は減り続けている。

熊用の罠
捕獲後「お仕置き」して山奥へ放す試みもあるが、繰り返し里へ戻るものもある。

農家からカボチャを盗み出すサル

をもたらすだけではなく、アルプスの稜線にまで登り、ライチョウの卵を食べるほどになってきています。

近年、里山の荒廃と個体数急増により、野生動物による被害が拡大しています。緩衝地帯や電気柵が全国各地で設けられ、さらに自衛隊出動による防護柵設営に関する法案が国会で検討されています。

（宮下健司）

社会

発掘された火災の跡

建物に使われたと考えられる炭化材が発見された竪穴住居跡（松本市境窪遺跡）

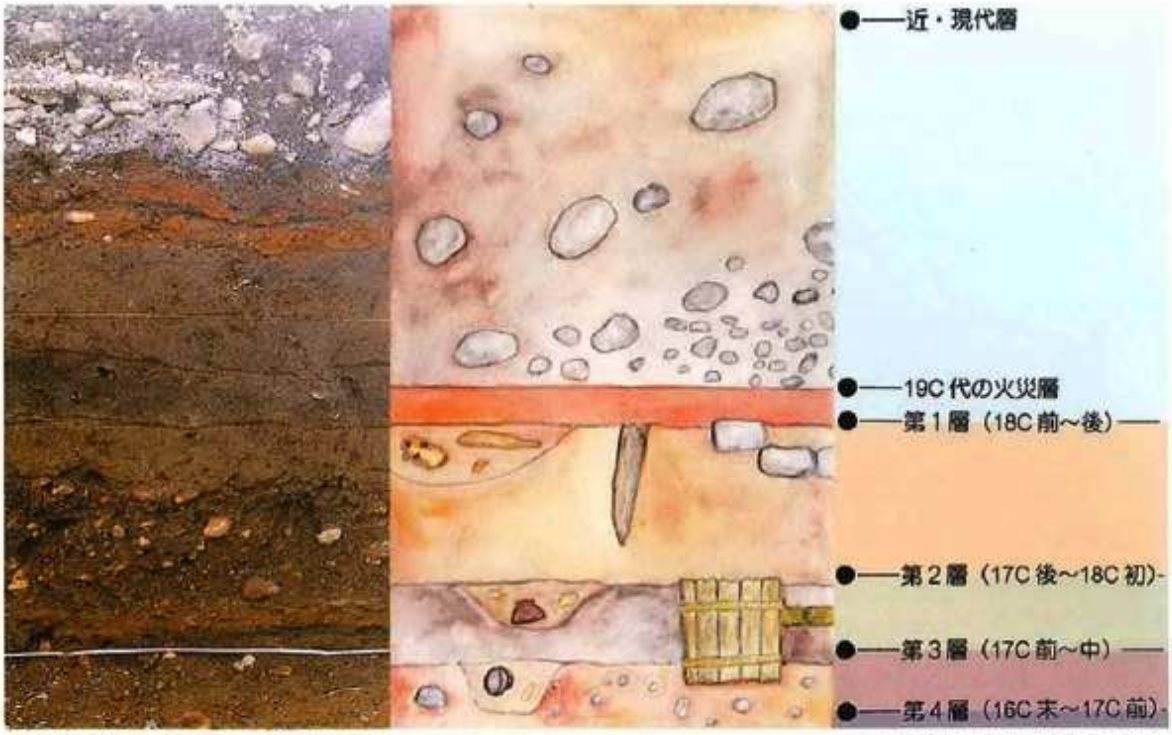
火災にあった面から発見された建物の跡
（松本市本町）

◆なかなか見つからない火事の跡

火事は昔の記録に、よく登場します。しかし、発掘調査では火災にあった建物跡はなかなか見つかりません。竪穴住居跡を調査していると、炭化材が床面より高いところから見つかったりしますが、人が住まなくなった家を焼いた可能性もあります。しかし都では、薬師寺西僧坊（奈良県）など火災に遭った寺院の跡が発見されています。

◆城下町の火事

発掘調査で火災の跡が見つかるのは、江戸時代の城下町跡の調査をしているときです。人びとが軒を接して家を作ったせいでしょうか、多くの町家が焼失した痕跡が見つかっています。県内では、松



松本市伊勢町の地層（松本市城下町跡）
戦国時代（16世紀末）から明治時代までに、火災にあった面を埋めて現在の地面ができあがっていることがわかる。

（『松本城下町跡　伊勢町』より）

本・飯田・松代・高遠などの城下町が調査されています。

とくに松本城下町では何回も火災にあった、赤褐色（せきかっしょく）に焼けた地面や、黒く焼け焦（こ）げた柱材、火を受けて変形した陶磁器の皿などが出土しています。かつて砥石（といし）問屋だったとされる店屋跡からは、火を受け売り物にならなくなった群馬県産の砥石がたくさん見つかりました。

城下町に住んでいた人々は、火事で焼けた木材や生活用具を片付け埋めたゴミ穴も見つかっています。災害に負けずに町を再建していく様子が発掘調査からわかります。

（原　明芳）

火を受けて捨てられた砥石（松本市本町）

火災に遭った陶磁器（松本市本町）

写真提供：松本市教育委員会

社会 村の火事・町の大火

五人組帳（長野県立歴史館蔵）
前書きに守るべき事項が列記されており、毎年名主（庄屋）が百姓・町人に読み聞かせて、徹底が図られた。

3月24日夜大地震火災危難の略図

岩石町裏通りに炎々たる焼亡を見る略図（『地震後世俗語之種』／真田宝物館蔵）
1847年5月8日（和暦の弘化4年3月24日）午後10時頃発生した善光寺地震は、たちまち火災を引き起こし、善光寺町町屋の9割を焼きつくす大火となって、10日（和暦26日）の昼ごろようやく鎮火した。

秋葉神社の石碑（高森町牛牧）
遠州（静岡県）の秋葉神社は、火伏せ（火事を防ぐ）神として信仰され、県内各地で祀られ、お札が配られた。

◆火事への恐れと備え

木とワラを素材とする日本の家は、村・町を問わず毎年のように火災にみまわれました。

江戸時代の五人組帳の前書きには、「火の元は、五人組で常に点検する」こと、「消火の諸道具は支障のないように整えておく」こと、「村内で出火があったら、百姓全員で村の郷蔵に駆けつけ、類焼しないよう防火しなさい」などと、防火や消火の手順が決められています。

◆町の大火

城下町や宿場町は、人家が密集しているため、ひとたび火事が起こるとたちまち広い範囲が焼き尽くされる大火となりました。

松本城下町では、1776年（安永5）に1,217軒、1803年（享和3）に2,027軒、1865年（慶応元）に約1,200軒を焼く大火がありました。大火の混乱は、糸魚川からの塩や魚類の流通を停滞させまし

幕末頃の松本町（『東筑摩郡村誌』／長野県立歴史館蔵）
家屋が密集する城下町の町屋。各町の辻には防火用の火の見櫓が立てられている。

た。松本藩は穀物を支給し、復興資金を貸し付けるなど被災者の救済をおこないますが、それは藩の財政に大きな負担となりました。

藩では14組の火消し組をつくり、城内や町内各所に水籠などの火消し道具を備えさせました。また、防火帯とするため、安永の大火後には本町と中町の道路幅を広げています。

◆戦争による火災

平和が長く続いた江戸時代でしたが、幕末から明治の激動期には戦闘による火災がありました。

1864年（元治元）、尊王攘夷を掲げて京都を目指す水戸浪士隊と、それを止めようとする諏訪藩と松本藩の連合軍との間に和田峠の下で戦いがありました。この合戦により麓の樋橋宿が焼けています。

1868年（慶応４）、旧幕府の歩兵隊が飯山城下に侵入しました。新政府の命令で中野陣屋と松代藩は、飯山藩を援けてこれを攻撃します（飯山戦争）。退却する歩兵隊は町に放火したため、城下町の658棟が焼けました。（児玉卓文）

火事場装束（長野県立歴史館蔵）
松本藩松川組大庄屋清水又之丞（大町市常盤）は、1834年（天保５）の松本城下の火事に、火事羽織を持って駆けつけようとした。

和田峠砥沢口合戦の図（長野県立歴史館蔵）
赤くぬられているのが、戦火で焼失した家。

飯山合戦の図（個人蔵）
上下を区切っているのが千曲川。愛宕町・背町が火に包まれ、家中（武家）屋敷の一部も燃えている。

社会 大火を乗りこえて

燃えさかる炎

消火活動にあたる人びと（通り町２丁目）
昼を眉にしなければならないほど火の勢いは強かった。

飯田大火の広がり（『わたしたちの飯田市 3,4年』より）
扇町で出火した火災は、飯田線から南の市街地のほとんどを焼きつくした。

焼け跡
すべてを焼きつくした焼け跡は、空襲のあとを思わせる。その中で人びとはガレキの片づけをはじめている。

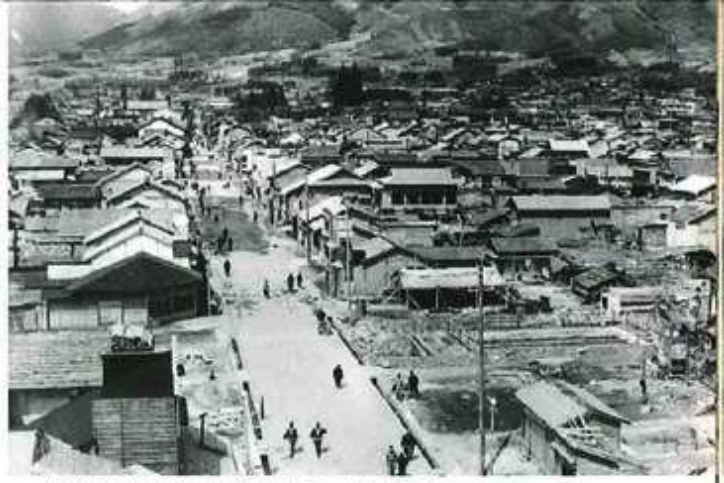
◆市街地の８割を焼きつくした飯田大火

1947年（昭和22）４月22日の昼ごろ飯田市扇町で発生した火災は、折からの強風にあおられ、次つぎに市街地を焼いていきました。火が完全に消えたのは翌23日の明け方でした。この火事で焼けた家は3,577戸、焼け出された人は１万7,778人でした。この日は、花見に出かけたり、選挙に出かけたりしていた人が多く、家から荷物を運び出すことができないまま、焼け出された人もたくさんいました。

◆防火都市をめざして

飯田大火のあと飯田市は、
①防火帯を設けた広い道路をつくる。
②市街地の道路の幅を広げる。
③防火水そうの数を増やす。
を中心とする復興計画を立て、「防火都

大火直後の飯田市街（追手町小学校屋上より）



復興途上の飯田市街（追手町小学校屋上より）

復興した飯田市街地（追手町小学校屋上より）

市」をめざし町づくりを始めました。市街地に土地を持つ人全員から３割の土地を無償で提供してもらうことをはじめ、復興にはさまざまな困難がともないました。

しかし、「２度と大火をおこさない」という市民の願いをもとに工事は進み、1953年（昭和28）復興工事は完了、防火都市飯田が誕生しました。

◆復興のシンボル・リンゴ並木

飯田市街地のシンボルのリンゴ並木は、大火からの復興中、飯田東中学校の生徒の発案でつくられました。防火帯の中心に植えられたリンゴは、今でも東中の生徒たちにより守り、育てられています。

（前澤　健）

貯水池をそなえた防火帯道路
現在貯水池にはふたがされ、上に木が植えられている。

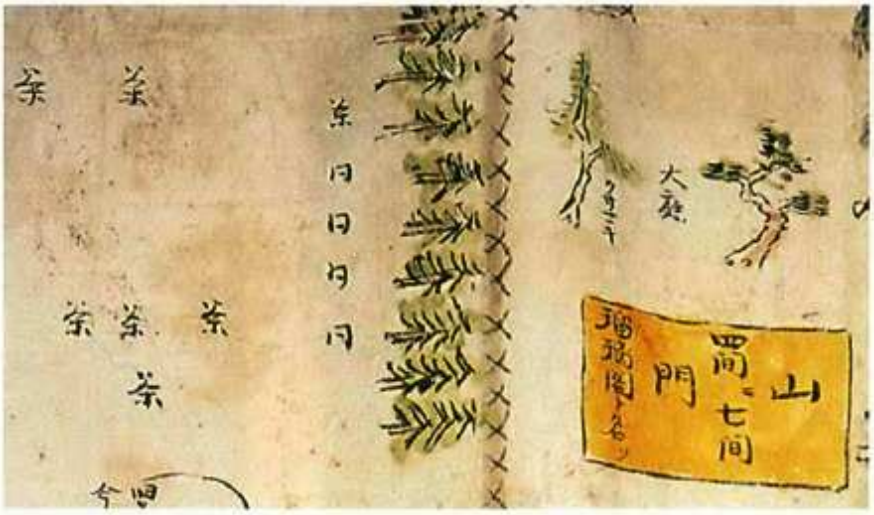
裏界線
各通りの間には、防火のため裏界線とよばれる幅１mほどの道がつくられた。

リンゴ並木

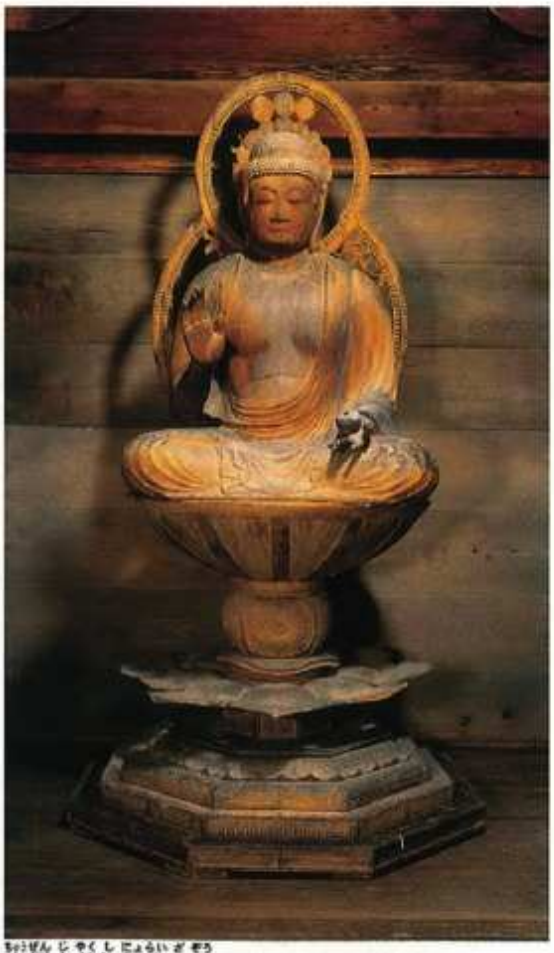
（白黒写真は、飯田市立中央図書館所蔵）

古代・中世の病をさぐる

平城京木簡（模造　当館蔵）
信濃国特産品の大黄は薬として貴族に珍重された。



開善寺境内絵図（飯田市開善寺蔵）
茶は中世の禅宗寺院での儀礼で用いられるため栽培され、健康のための薬としても重要視された（図の左側に茶畑が広がっている）。



中禅寺薬師如来座像（上田市／重要文化財）

◆流行病の時代

737年（天平９）、奈良の都は疱瘡（天然痘）が大流行しました。藤原四兄弟（房前・麻呂・武智麻呂・宇合）ら政府の要人もこの病にかかり相ついで没しました。朝廷は病人に米・布など支給したり税を免除するなどしました。信濃国でも703・704・710年（大宝３・慶雲元・和銅３）に疫病が発生し、薬が支給されたことが記録に残っています。全国では毎年のように流行病が発生し、鎌倉時代に信濃の知行国主となった藤原定家も多病で知られ、日記に病のことを記しています。

戦国時代、武田信玄の領国は飢饉が頻発し餓死者が多数出ています（『妙法寺記』）。飢饉がおこると、栄養不足で抵抗力が弱くなった人びとが流行病にかかる、という悪循環を繰り返しました。

「餓鬼草紙」（東京国立博物館蔵）
京都鳥辺野周辺の惨状を描く。

◆病のイメージ

「餓鬼草紙」には野ざらしになった女性のまわりに多くの餓鬼の姿が描かれています。餓鬼とは生前の悪行のせいで醜悪な姿となり、飢えに苦しむ亡者です。疾行餓鬼は疫病が広まると猛烈な勢いで集まってきます。平安時代末、たび重なる飢饉や流行病で都ではたくさんの死体がみられたといいます。この絵はそうした社会情勢を仏教的な目で描いたもので、当時の京都周辺のようすはこのようなものだったといわれています。

おなじ頃描かれた「病草紙」にも、病に苦しむ人びとが描かれています。絵の悲惨さを通じて人びとに仏教の教えを尊び、信心の大切さを伝えようとしたことを暗示しています。薬師如来が信仰されたのは、仏の力によって病から逃れようとする人びとの信仰の表れでしょう。

（村石正行）

「病草紙」（京都国立博物館蔵）
眼病に苦しむ様子を描く。

社会

麻疹は命の品定め 疱瘡は面の品定め

源為朝と疱瘡神の絵馬（下條村大山田神社蔵）

江戸時代、源為朝は疱瘡の流行を収める神として信仰された。この絵馬は、未年、酉年生まれの者が疱瘡の完治を感謝し奉納したものである。源為朝は保元の乱（1159年）の際、崇徳上皇方につき奮戦するが、敗れて八丈島へ流される。そこでは疱瘡が流行しなかったため、疱瘡神として信仰されるようになった。

「疫病見舞おほへ帳」（佐藤家文書／当館蔵）

病気になった時、見舞いに来た人や見舞いの品を記録したもの。疱瘡の場合は、完治の際「疱瘡祝」をする場合もあった。

◆江戸時代の病

古代・中世、多くの人びとの命を奪ってきた疱瘡や麻疹は、江戸時代の人びとにも脅威の一つでした。感染力の強い麻疹は、病気に対する抵抗力の弱い子どもの命を奪いました。また、疱瘡は完治しても顔にあばたを残しました。

◆病とたたかう人びと

自分たちの力でどうすることもできない伝染病に対して人びとは、お日待をして流行が収まるよう神仏に祈ったり、病をもたらす神を村境まで送ったりしました。村境の道にしめ縄を張る「道切り」

デイドーボー（長野市大岡）
デイドーボーとは疫病神送りのわら人形のことである。村人は疫病神に見立てたわら人形を村境に送り出すことによって、災いを村外へ追いやった。

道切り（麻績村横屋）
村境などに張られた「道切り」とよばれるしめ縄は、伝染病をはじめとする災いが村へ進入するのを防ぐ結界の役割を果たした。

は、病が村に入らないようにしたなごりです。

また、人と物の交流が活発になると各地でおこなわれていた民間療法が広がっていきました。1737年（元文２）狂犬病が下伊那に侵入した時、すでに流行していた西日本から対処法が伝わっていました。人びとは、ただ神仏に祈るだけではなく、伝染病とたたかおうとしていたのです。

◆開国と新たな伝染病

開国後、外国との交流が本格的にはじまると、さまざまな伝染病も入ってきました。その中でもコレラは、1858年から61年（安政５～文久元）にかけて大流行しました。このとき江戸では、10万人が死亡したといわれています。松本藩の大町組では「時疫予防法」という刷り物を配布し、コレラへの予防につとめました。

（前澤　健）

時疫予防法　大町組（清水家文書／当館蔵）
1858年（安政５）９月コレラの流行に対して松本藩大町組の名前で出された刷り物。予防法や対処法を記している。

社会 近代の伝染病

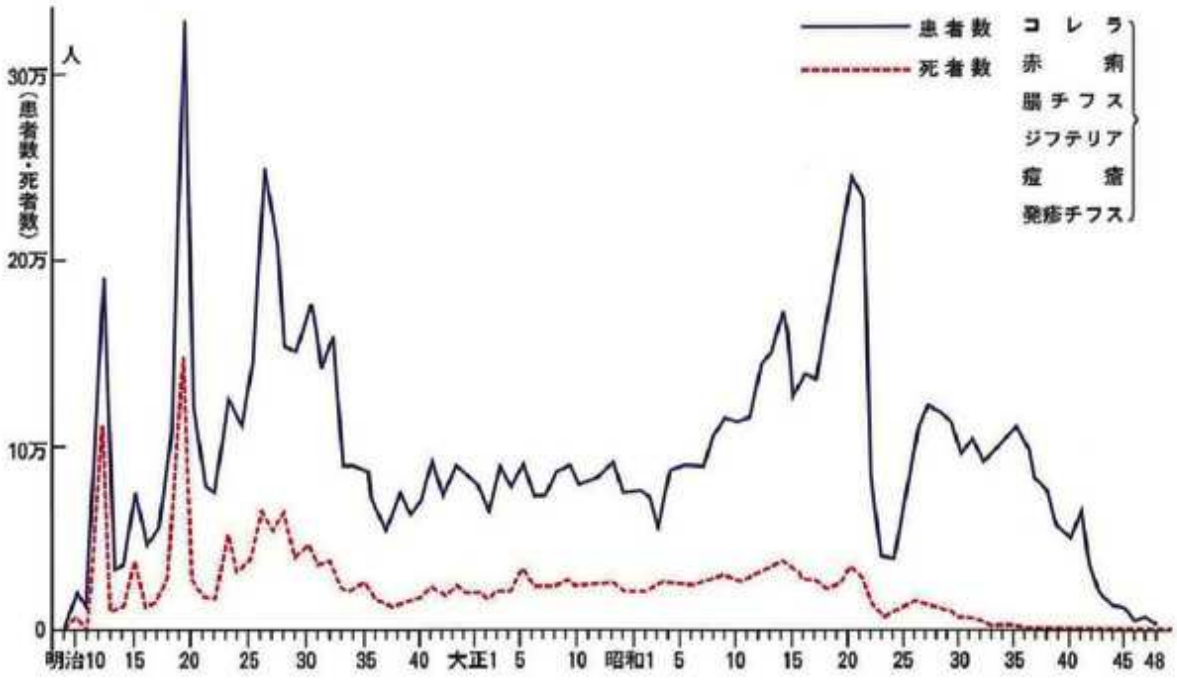
「流行悪疫退さんの図」錦絵（明治13年刊／日本ベーリンガーインゲルハイム㈱発行『日本医療文化史』より）
頭はライオン、胴が虎の怪獣に見立てたコレラを人びとが追い立てようとしていて、洋服の紳士が石炭酸を噴霧している。石炭酸の防疫の進歩的知識を示すものであった。

◆近代の伝染病の広がり

近代のおもな伝染病は、チフス・コレラ・痘瘡・麻疹の４疾患で、1880年（明治13）の伝染病規則では、コレラ・腸チフス・赤痢・ジフテリア・発疹チフス・痘瘡の６種となり、1897年（明治30）の伝染病予防法制定時にはさらにペスト・猩紅熱が加えられました。

幕末から明治初期における急激な社会変動と人口の大幅な流動化によって、伝染病は全国に蔓延し死者も急増、長野県も例外ではありませんでした。

開所時の富士見高原療養所玄関・富士病棟全景（大正15年12月撮影／旧富士見高原療養所資料館提供）
病棟ベランダでの日光療法。空気のきれいな高原には結核病棟が建てられた。



特定伝染病患者数・死者数の年次推移の図（吉川弘文館『日本医療史』より）

当時の医学の水準と医療体制では、こうした急性伝染病に適切に対応することは難しく、全国規模の流行は、医療・衛生分野にとどまらない深刻な社会問題となりました。

◆防疫対策と長野県

1879年（明治12）のコレラ大流行の際には、警察による衛生政策が断行される一方で、病気を防ぎ健康を守ろうとする住民の自主的な動きもみられました。東筑摩郡では、選挙で決められた衛生委員が予防消毒等に活躍した結果、コレラ患者が一人も発生しませんでした。

翌年長野県にも衛生課が設置されましたが、県内に医学専門学校が設置されるのは、1944年（昭和19）を待たなければなりませんでした。また、亡国病ともよばれた結核に対処するため、空気のきれいな信州の高原には多数のサナトリウム（結核病棟）が建てられています。

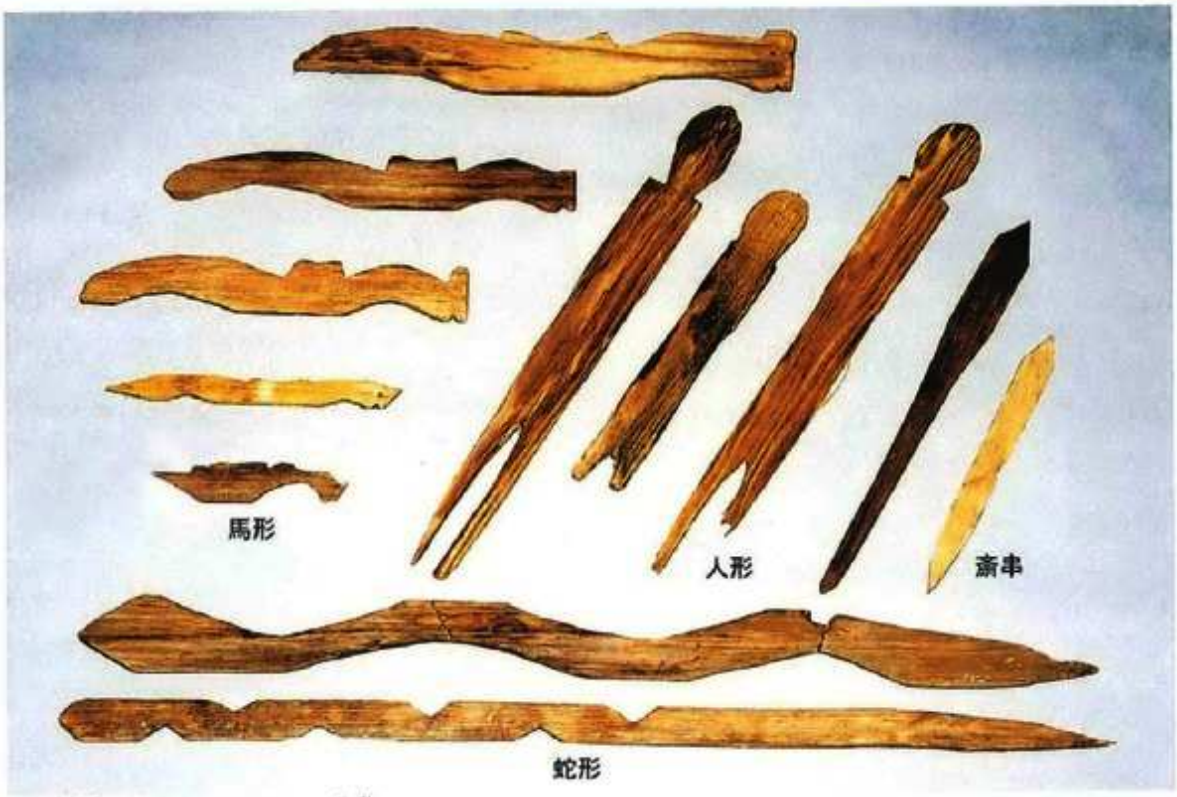
リュンドルベスト啓蒙錦絵（明治４年刊／日本ベーリンガーインゲルハイム㈱発行『日本医療文化史』より）
「伝染病予防法（うつりやまいふせぎかた）」と題し、ペスト流行に当たっての予防法を啓蒙したもの。

注）「伝染病予防法」は、1999年（平成11）から「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（感染症法）となった。

しかし上・下水道の完備などの環境・公衆衛生は、重要な公的防疫対策であるにもかかわらず、財政面などから遅々として進まず、急性伝染病（細菌性赤痢・腸チフスなど）の流行は繰り返されました。

（森山俊一）

生活 わざわいを避ける



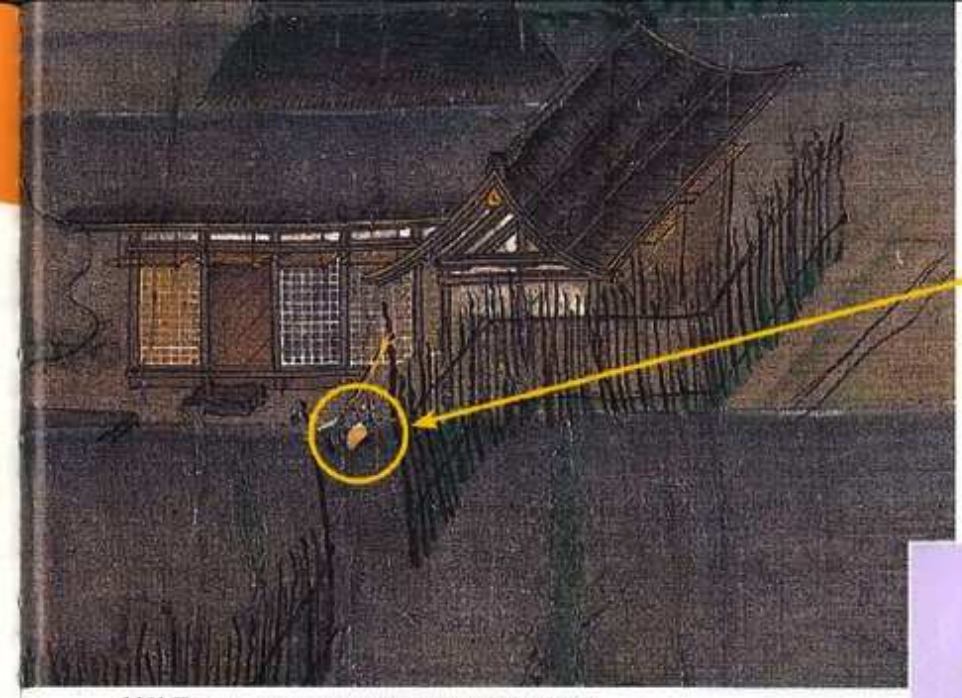
木製形代（人形・馬形・蛇形）と斎串（千曲市屋代遺跡群／当館蔵）
千曲市屋代遺跡群では古代の形代や木簡を含む板状木製品が多数出土した。これらは千曲川の旧流路に流されたもので、飛鳥時代には「蛇形」や「馬形」が、奈良時代になると「人形」が多くなる傾向がある。結界を表すとされる斎串は、古代において時代を問わず大量に出土している。

呪符木簡（長野市石川条里遺跡／当館蔵）
低地水田域の中世の溝から出土した木簡。（符籙＝まじない文）

◆悪霊をはらう

古代の人びとには地震や洪水といった天変地異、疫病の流行や飢饉などは、悪霊や邪気がもたらす災厄と考えられていたようです。これらを除き、心身の穢れを取り去るための、「祓い」が各地でおこなわれました。「祓い」の際には、「撫物」とも呼ばれる人などの形をした「形代」に災厄が移され、川や溝、井戸などの清浄な水に流されました。「形代」にはそのほかに馬や鳥、舟や蛇の形をしたものがあり、さまざまに組み合わされて用いられました。

飛鳥時代には「大祓」が宮中の行事と



勧請吊り（一遍上人絵伝複製／原資料清浄光寺蔵）

勧請吊り複製（当館蔵）

江戸時代後期の蘇民将来符（上田市立信濃国分寺資料館蔵）
蘇民将来符は疫病除けの守護神で、『備後国風土記』に説話がみえるように、その信仰は古代から続いている。信濃国分寺（上田市）では、毎年正月明けの八日堂縁日で護符を授けている。

して始まり、平安時代へと受け継がれていきました。古代から中世の木簡には、「災いよ、すみやかに退散せよ」という意味の「急急如律令」という呪文が書かれたものも多くみつかっています。

◆災いを避け、心身を護る

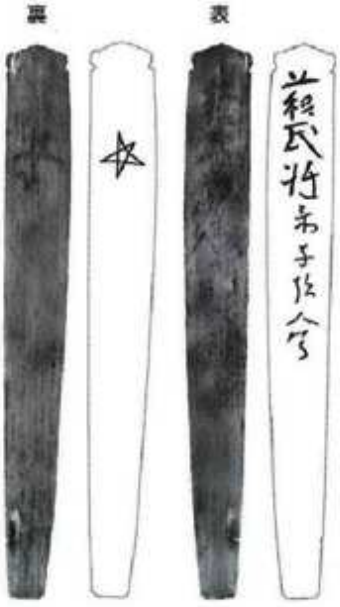
災いから心身を護るために、人びとは神仏にすがって読経や祈祷に励むだけではなく、道教・仏教・陰陽道等に由来するとみられるまじないも盛んにおこないました。

中世には外からの災いの侵入を防ぐために「勧請吊り」が寺庵などの入り口に吊られ、「蘇民将来」と記した札や六角形の護符が社寺から授けられました。

子どもが生まれるとへその緒を「胞衣壺」に入れ、床下などに埋めて健やかな成長を祈ったり、墓には六道銭を入れて死後の安寧が祈られました。

自分の身にふりかかる災いを避けたいという気持ちは今も昔も同じなのです。

（水沢教子）



蘇民将来信仰に関わる県内最古の出土資料
（千曲市東條遺跡／長野県埋蔵文化財センター蔵）
長さ22.7cm幅2.8cm厚さ1mm。表には「蘇民将来子孫人（家カ）」。裏にはセーマンと呼ばれる五芒星が描かれている。

わざわいに立ち向かう人びと —通史・民俗—

松代群発地震の際の噴砂

地盤の「液状化現象」にともなう「噴砂」は、松代群発地震では長野市柳原地区の千曲川河原で記録された。液状化は堤防決壊などにもつながる恐ろしい現象である。

発掘によって明らかにされた過去の地震の跡

善光寺地震の際、篠ノ井光林寺下の段ノ原地籍では「平地より一丈余も高き丘陵となりたりし」と地表に断層が現れたことが記録されている。京都大学が2006年（平成18）に発掘したところ、はっきりした東傾斜の逆断層が検出された（左）。千曲川沿岸の発掘調査によっても、液状化にともなう噴砂の跡が発見された（中央）。

長野市小森から発見された堤防石垣

戌の満水後の千曲川の流路変更は大工事であった。松代城でも防衛面よりも災害対策が優先されている。

◆遺跡に刻まれた人びとのくらし

群馬県渋川市の黒井峯遺跡では6世紀中頃の古墳時代後期、榛名山噴火による大量の軽石が竪穴住居を埋めてしまいました。噴火が止んだ後、人がその住居に戻って家財道具を掘りだしたようすが発掘で明らかにされました。

長野県内でも高速道建設にともなう発掘により、弥生時代中期から江戸時代までの地震のようすや洪水が何度も沿岸を襲ったことが明らかにされました。とくに仁和の大災害（P6参照）と思われる洪水によって、長野市篠ノ井石川条里や千曲市雨宮条里の水田は、厚い洪水砂に埋もれてしまいました。しかし千曲川沿岸に住んだ人びとは、その上に新たに水田を切り開いて耕作を続けてきたのです。

「戌の満水」（P8参照）による大きな被

「信州地震大絵図」（右半部分／真田宝物館蔵）
左半分は松本藩領にまでおよぶ。右半分は善光寺平を覆い尽くした洪水の跡がなまなましい。松代藩主（真田幸貫）が江戸へ持参したと思われる資料。

『感応公丁未震災後封内御巡視之図』（真田宝物館蔵）
水内郡倉並村（長野市七二会）の山崩の様子。感応公（真田幸貫）が、絵師・青木雪卿に命じて、領内の善光寺地震被災地を描写させたもの。

害を受け、幕府の国役普請にあわせて松代藩では大規模な瀬直し（流路変更工事）を実施します。長野市小森では1747年（延享４）以降、畑地の中に新河道が開かれました。集落側の補強に長さ150mにわたり３回も堤防石垣を築いていたことが、2007年（平成19）の発掘で明らかになっています。

◆善光寺地震後の対策と復興

1847年（弘化４）の善光寺地震（P18参照）の際、善光寺ご開帳中の善光寺町は火災となり（P56参照）、多数の被害を出しました。激震地域は上田から新潟県上越におよび、全壊３万4,000戸、死者１万2,000人に達しています。

西山地方（長野盆地西部）の山崩れは４万か所。岩倉山（虚空蔵山）の崩落で堰き止められた犀川は、諏訪湖の七割の大湖水となりました。決壊を恐れた人びとは高台の仮設小屋で避難生活をおくり、松代藩では村人を毎日千人も動員して川除土手を築いたり、助け船・筏、炊出しを手配しました。５月27日（和暦の４月13日）夕方、大音響とともに決壊、

天然ガスの風呂に入る人（『地震後世俗語之種』より）
善光寺地震により、浅川真光寺地籍では石油と天然ガスが吹きだした。地元住民が風呂桶を持ち込んでガスで風呂を湧かして入っている。右下は部分拡大。

長野市小市での水の高さは６丈６尺（約20m）に達しました。

田野口村（長野市信更）の地方役人であった小林唯蔵は６月８日に被災者の食糧について申達し、穀物・味噌・塩等を配分、村役人を励まし救援にあたりまし

長野市篠ノ井塩崎「越のドンドヤキ」(県無形民俗文化財)
悪神の顔を描いた大型のワラ人形「オスガタ」を、五穀豊穣・子孫繁栄を願い、旧年のダルマなど縁起物と一緒に焼く。

悪神・疫病送りの藁人形
長野市信更軽井沢の悪魔払いの人形（上）、安曇野市柏尾のカザガミサマ(風神)（下）。疫病送りのワラ人形を作り、そこに村の中や村人の厄を託して村境に送り出す。

長野市大岡芦ノ尻では、村境の石造道祖神に注連縄で神面装飾を施して外から悪いものがムラに入り込まないように見張っている（県無形民俗文化財）。

た。松代藩は被災直後から幕府に被害状況を報告して２万両の拝借金を申請（１万両貸与）、炊き出し、手当金、米の下付など１万6,000両を出費して領民を救済しています。

◆秋葉信仰と疫病への対処

松本城下では、善光寺道などの両側に細長い家並みが連なり、まさに「鰻の寝床」状態でした。いったん出火すると類焼は免れず、何度も大火に見舞われています（P54参照）。三九郎の火祭りを行う道祖神碑の城下への建立は禁止され、寺社の敷地は災害時の避難地として、火除地・明地（空地）となっていました。

都市化が進んだ江戸中期以降、火伏せの神・秋葉信仰が爆発的に流行しました。戸隠生まれとされる三尺坊が祀られる駿河（静岡県）の秋葉山は参拝者で賑わい、参詣道は秋葉街道と呼ばれ、多くの町や村で秋葉山が勧請され祀られました。信州での拠点となった戸隠の教釈院、木島平村の長運寺などでは秋葉山のお札を村

道切りの注連縄（長野市大岡芦ノ尻）

人に配布しました。

江戸時代の日常の病気は、風邪・疱瘡・麻疹・眼病などがあり、労働のため腰痛・あかぎれなどに悩む農民が大勢いました。一般農民が医師や薬に頼るのは、経済力が高まった江戸後期以降です。幕府も1733年（享保18）、飢饉に際しての時疫対策として薬法書を出しています。とくに疱瘡は流行病（P60参照）で死亡率も高く、各村には疱瘡神を祀った疱瘡神社が建てられ、これを自分の屋根に祀ったり、ワラ人形をつくって村境に追い払ったりしました。

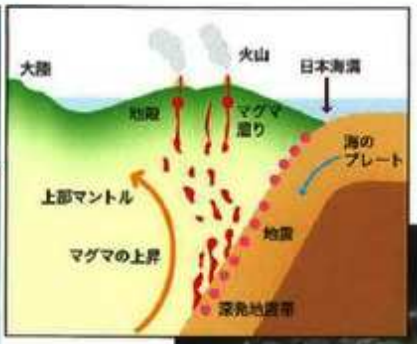
◆ムラを護る仕掛け

日本の村は基本的にムラ（村）―ノラ（野良）―ヤマ（山）という三重の同心円構造を持っています。人びとが家に住むムラはムラウチとも呼ばれて外から悪病神等が入り込むことを防ぐため、ノラとの境に道祖神・庚申塔・二十三夜塔などの石造物を立てたり、道切りの注連縄や大きな草鞋を吊しました（P61参照）。またノラとヤマとの境には三峰・荒神を祀って何重にもムラを護ってきました。

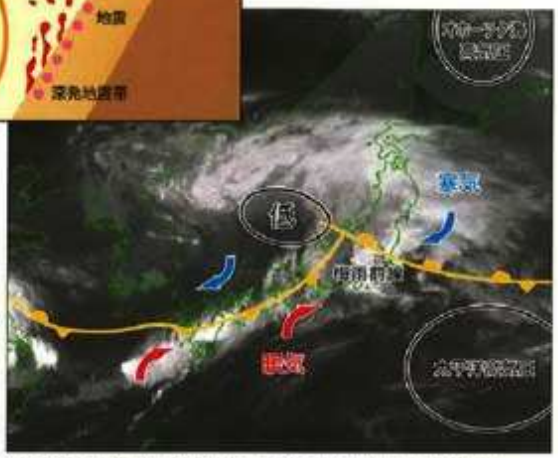
松本市岡島（上）、麻績村裾浦などでは大きな草鞋をムラの入り口に吊し、「村内に大草鞋を履く者がいる」と外に向かって威嚇した。

ワラ人形が疫神に見立てられたのは、境界の神が災厄の侵入を阻止したり、追放したりする守護神だったからです。村人は「疫病神という悪」を目にみえる「わら人形」にして村境に送り出すことによって、村の中の不安や緊張を和らげ、安心して暮らせる村の共同世界を回復・再生させようとしたのです。（宮下健司）

付録 現代社会と災害 ―総論―



日本列島付近のプレートと火山の生成モデル
長野県内にはプレート境界が走っていると考えられている。右上はプレートの境から火山のマグマが生み出される模式図。



梅雨期の典型的な天気図（気象庁提供の図に加筆）
大陸からの寒気と太平洋上の暖気との境界が日本列島上にできて前線が停滞、長雨となるケースが多い。

県内の主な活断層
「長野県活断層分布図」1985から

長野県内の主な活断層
長野県には、糸魚川－静岡構造線に関係する断層帯をはじめとして、多くの活断層が存在する。

◆日本の位置と災害

日本列島は、ユーラシア大陸の東縁に位置する弧状の島じまから成り立っています。この形はわが国が地球の表面をおおっている複数のプレート（地殻の板）が、押し合ってできたもので、環太平洋火山帯とも重なり、地震や活火山が多い地域といえます。また大陸と太平洋との境は、梅雨や台風、そして冬の季節風と大雪、夏の旱魃など気象変動の激しい所ともなっています。

なかでも長野県は、プレートの境にあたる断層帯に接して誕生した高い山岳地帯にあり、気候的には太平洋と日本海両方の影響を受けています。私たちの先祖は、こうした自然環境のもとで生活をしてきました。

長野市周辺の洪水ハザードマップ（災害予測地図）部分（長野市危機管理防災課提供 2007年（平成19）3月）

100年に一度程度の大雨による洪水時に想定される浸水などを色分け、避難所や防災関係施設など「いざというとき」の情報も掲載している。

◆災害と防災

現在、わが国では「災害対策基本法」を制定、災害について「暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火その他の異常な自然現象又は大規模な火事若しくは爆発その他（中略）の原因により生ずる被害」などと定義しています（ほかに「国民保護法」で、武力攻撃や大規模テロによる災害も定めています）。

災害を未然に防ぐための行為を「防災」と呼びます。しかし本書でも触れてきたように、人間が生活していくうえで災害は避けて通れない面もあります。近年では災害による被害をさまざまな対策により最小限に抑える「減災」という考え方も出てきています。

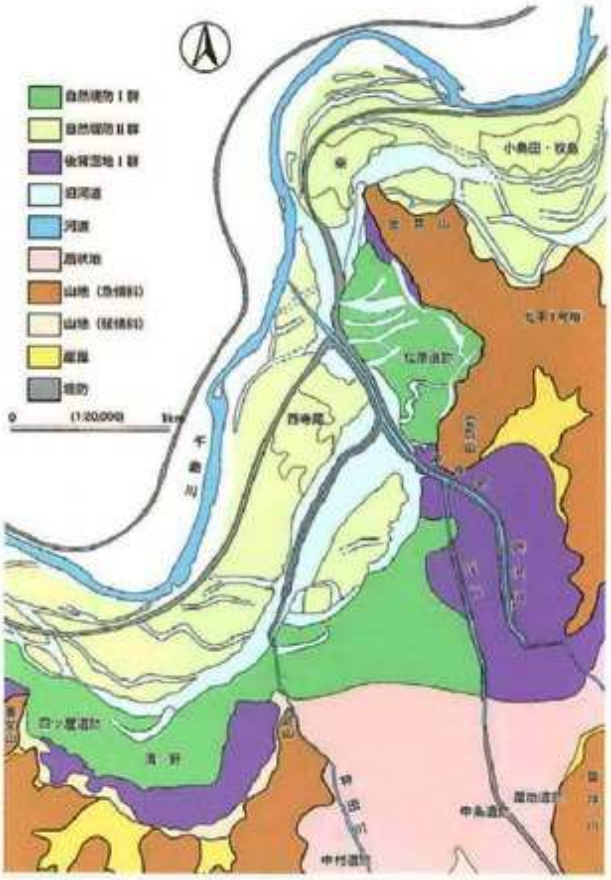
各種の防災計画や防災訓練、ハザードマップの作成と周知、緊急地震速報などは、そうした防災・減災への取り組みといえます。しかし災害に関する情報の提供は、ともすれば過剰な反応やパニックを引き起こす危険性も持っています。一人ひとりの冷静な行動が災害からの被害を小さくします。

警戒情報の告知パンフレットと災害の速報
さまざまな災害への警戒、そして災害発生時の速報など「情報」は防災の要。

◆長野県の防災対策

山がちな信州では、人びとは昔から低地や傾斜地でも生活を営んできました。しかし河川の近くでは自然堤防（河川の土砂が溜まった微高地）上や、地滑りの跡地でも比較的安全な場所を選んで集落

火山災害に対する防災模式図（『浅間山の火山災害と防災』より）
噴火による災害のほか、堆積した火山堆積物が流出する土石流災害に対しても、監視と避難体制の整備が進められている。



千曲川の旧河道と自然堤防
（『松原遺跡発掘調査報告書』より）
洪水の被害から比較的安全な自然堤防上や扇状地を選んで、古い時代から人びとは生活してきた。現存の集落と遺跡のある場所は重なることも多い。

をつくってきたのです。近年では、かつての氾濫原や土石流の堆積地など、いままで人が住まなかった場所まで住宅地となる場合もあるようです。また過去の火山災害の被災地内まで観光施設や別荘が建てられたりしています。

長野県内でも、県や市町村、広域連合等が中心となって、さまざまな災害に対する対策をおこなっています。長野県では「長野県地域防災計画」を定めて災害に備えるとともに、『長野県防災ハンドブック』を配布して、日常や家庭の中での防災意識の高まりを応援しています。

◆現代社会と防災

1995年（平成7）の阪神・淡路大震災では、交通網やライフラインの切断など都市型の被害が注目されました。また以前は生活様式の中に織り込まれていた大雪が、「豪雪」として災害視されるようになるなど、現代社会特有の災害のかた

電気は食料は「孤立」深刻
台風で交通打撃 八坂村・信州新町
いつ復旧… 疲れ切り
「体が宙に浮いた」
柱 土台からずれる

台風災害で孤立した集落（信濃毎日新聞提供）
2004年（平成16）10月の台風23号通過に伴い、長野県内でも大きな被害が出た。交通網が寸断され、山間の集落が孤立。県の防災ヘリコプターによって水や食料が届けられた。

地域住民による懸命な水防活動（長野県土木部提供）
災害からの復旧は、地域のつながりによって保たれている場合も多い。また近年ではボランティアの活動も重要視されてきている。

『長野県防災ハンドブック』
災害は恐ろしいものだが、被害を少なくするために、日頃から意識を高め、準備をしておくことが大切。

ちが次第にあらわになってきています。

山間集落の多い長野県では、災害時の孤立化は深刻な問題です。高齢化が進む過疎地域では地域コミュニティーそのものが維持できなくなってきており（限界集落）、高齢者や外国人、障がい者など、災害時に援護が必要になる可能性のある人びとと共に考えていかなければならない問題です。さらに地球規模では、温暖化といった大きな環境問題も、地域の災害に結びつく可能性が指摘されています（P41参照）。

このブックレットでも触れられているように、多くの災害が歴史のなかに刻み込まれています。人びとは災害がもたらすさまざまな影響を受けながらも、営々と生活を積み重ねてきました。

「歴史から学ぶ」、これは災害についても必要なことでしょう。　（滝澤正幸）

付録 信濃国・長野県 災害関係史年表

この年表は、『長野県史』通史編別巻（年表）・『長野県歴史大年表』（上・下巻）ほかを参考に作成し、信濃国・長野県に関係するおもな災害およびそれに関することがらを取りあげた。「おもな災害など」欄のことがらの前の●の色は、●水害など ●地震・崩落・火山など ●気象（飢饉）・落雷・虫害など ●火災・病など ●生活の中の信仰など をあらわす。

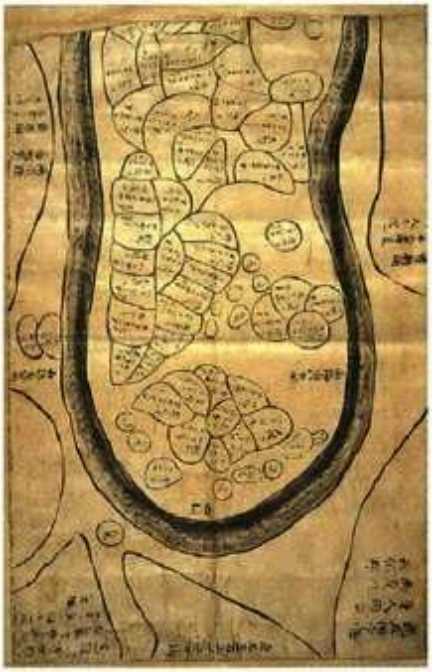
西暦	元号	年	おもな災害など
627			●蠅が集まり雷音の鳴るように信濃坂を越え、上野国にいたって散ると伝える。
660			●この年、科野国（信濃国）、蠅が群がり西に向かい巨坂を越えると奏し、百済救援軍の敗北を予兆させる。
682			●信濃国、降霜・大風で五穀不熟と奏する。
685			●信濃国に灰が降り、草木がみな枯れる。
690			●勅使を竜田風神と信濃国須波の神・水内の神に遣わし、風鎮めのための祭りを行わせる。
701	大宝	元	●信濃国、蝗害・風害で作物・家屋を損なう。
703	大宝	3	●信濃・上野二国、疫病流行し、薬を給される。
704	慶雲	元	●信濃国疫病、薬を給される。
710	和銅	3	●信濃国疫病、薬を給される。
714	和銅	7	●遠江国（静岡県）でおきた地震により山崩れが発生し、遠山川（飯田市）がせきとめられ、林が埋没した。
			●この頃、屋代遺跡群から祭祀に関する斎串などの木製品、あるいは土製品が出土する。
728	神亀	5	●国家平安のため、諸国に金光明経各10巻を頒つ。
737	天平	9	●疫病退散祈念のため、国ごとに釈迦三尊像をつくらせ、大般若経を写させる。
741	天平	13	●諸国に国分寺、国分尼寺をつくらせる。
762	天平宝字	6	●信濃・美濃・飛騨などに地震がおこる。被災者に家ごとに穀2斛が与えられる。
763	天平宝字	7	●信濃国、飢饉により賑給される。 ●前年の霖雨、本年の旱害で諸国飢饉・疫病のため、今年の田租を免じる。
775	宝亀	6	●信濃・三河・丹後3国飢饉、賑給する。
816	弘仁	7	●信濃国、前年の凶作による窮迫を救うため、商布を販売して得た1万斛を困窮民に与えることを願い出て許される。
817	弘仁	8	●信濃国飢饉、使者を遣わして賑給する。このころ農村の荒廃、農民の流民化を防ぐ施策がとられる。
838	承和	5	●信濃など16国、7月以降連日天より降灰する異変を奏上する。
841	承和	8	●信濃国地震、一夜におよそ14回揺れ、公私とも大被害をうける。
843	承和	10	●信濃国、瑞雲が現れたことを奏上する。
853	仁寿	3	●この年、京をはじめ全国に疱瘡大流行、死者多数を出す。
866	貞観	8	●水内郡三和・神部両神に忿怒の心あり、これを鎮めるため勅して国司・講師に奉幣読経させる。
888	仁和	4	●信濃国で山津波から千曲川の大洪水がおこり、佐久・小県・更級・埴科・高井・水内6郡の人屋が流没、あまたの男女・牛馬が流死し、壊滅的な打撃を受ける（仁和の大洪水）。埋没した水田跡が千曲市や長野市などの条里遺跡で発掘されている。
889	寛平	元	●信濃国から人を食う鬼が洛中に入るとの風聞がたつ。
944	天慶	7	●天下大暴風雨、信濃国府の庁舎が倒壊し、この日国府に到着した信濃守紀朝臣文幹、圧死する。
956	天暦	10	●旱災により東山・東海・山陽道の田租を免除する。
975	天延	3	●東国に風害、信濃の御坂の道が崩壊する。
1058	康平	元	●信濃国、神御坂が霖雨のため崩壊したことを奏上する。
1103	康和	5	●御体御卜、神祇官、信濃国穂高神・小内神など諸国神がみの祟りがあることを奏上する。
1108	天仁	元	●浅間山、噴火する。
1112	天永	3	●京で東方に鳴動がつづく。この日信濃国に命じ、浅間山の噴火かどうかを記して上申させる。
1179	治承	3	●善光寺、焼亡する（善光寺火災の初見）。
1230	寛喜	2	●この冬、諸国の気候不順、飢饉となる。
1231	寛喜	3	●幕府、後堀河天皇の出した諸国国分寺災難除け読経令を、信濃など関東分国に施行させる。

西暦	元号	年	おもな災害など
1231	寛喜	3	●異常気象がつづき、諸国大飢饉、武蔵・美濃などで夏に雪が降る（寛喜の大飢饉）。
1268	文永	5	●善光寺、焼ける。井上盛長が善光寺を焼き払った罪で処刑されたと伝える。
1313	正和	2	●善光寺、焼失する。
1370	建徳	元	●この冬、駿河以東諸国飢饉。
1421	応永	28	●この頃、飢饉、厄病流行。
1425	応永	32	●善光寺焼失のことが京都に伝わる。
1427	応永	34	●善光寺、東門から出火し諸堂舎を全焼する。
1446	文安	3	●この年、信濃国大飢饉となる。
1448	文安	5	●この年、夏季に長雨が降り、信濃国飢饉。
1450	宝徳	2	●この年、浅間山、噴火する。
1461	寛正	2	●この年、諸国飢饉（寛正の大飢饉）、信濃も飢饉。
1474	文明	6	●善光寺炎上、如来堂などが焼亡する。
1480	文明	12	●諏訪上社前宮門前西大町で下社勢力と抗争、西大町が焼失する。
1482	文明	14	●この夏、諏訪郡で長雨水害、諏訪上社大町・十日市場・安国寺などを押し流し飢饉となる。
1483	文明	15	●諏訪氏内紛にまつわる諸勢力の抗争の中で、下社が焼かれる。
1484	文明	16	●佐久郡大井城落城し、城下集落が灰燼に帰す。
1495	明応	4	●この頃、高梨氏・村上氏が善光寺をめぐって争い、善光寺を焼き、善光寺を高井郡中野に持ち去る。
1505	永正	2	●この年、諏訪湖上に御渡がない。
1542	天文	11	●武田晴信、諏訪郡上原城を攻め、五日町・十日町・上原町を焼く。（以下合戦に伴う火災記事については省略）
1543	天文	12	●千曲川大洪水。埴科郡船山郷が流されたと伝えられる。
1547	天文	16	●諏訪社上社大祝諏訪頼忠、去年諏訪湖に御渡がなかったことを幕府に注進する。ついで、幕府、諏訪社にこれを祈禱させる。
1555	弘治	元	●諏訪湖に氷が張らず御渡がなく、諏訪社上社はこれを幕府に注進する。
1590	天正	18	●この春、浅間山、噴火する。
1591	天正	19	●この春、浅間山、噴火する。
1596	慶長	元	●信濃・甲斐・関東に洪水。百年来の大水という。 ●浅間山が爆発する。
1597	慶長	2	●浅間山が大爆発する。
1598	慶長	3	●浅間山が爆発し、参詣人800人余が焼死する。
1601	慶長	6	●関東から信濃にかけて疫病が流行。
1615	元和	元	●善光寺、雷火のため焼失する。
1641	寛永	18	●長雨・冷害により大凶作となり、餓死者が多く出る（寛永大飢饉）。
1674	延宝	2	●長雨低温から大凶作となり、延宝飢饉始まる。
1694	元禄	7	●筑摩郡鉢伏山西麓に7里余の猪土手が築造される。
1699	元禄	12	●大凶作により飢饉が深刻になる（元禄飢饉）。
1707	宝永	4	●宝永地震（震源：紀伊半島沖・M8.4）飯田藩領・松本藩領などで被害。
1715	正徳	5	●未の満水。梅雨の集中豪雨により、とくに天竜川とその支流に大洪水がおこる。
1717	享保	2	●松代町大火。以後松代町・領内に土蔵がつくられはじめる。
1718	享保	3	●伊那谷に大地震。各地で山崩れ発生。
1719	享保	4	●安曇郡沢渡村で雪崩がおこり、潰れ家・死者・死牛馬が多く出る。
1723	享保	8	●大霜で作物が枯れ、佐久・高井・水内郡などから御救い願いが出される。
1726	享保	11	●松本藩、城下町の火消し人足・道具を定める。
1730	享保	15	●多雨などから連年凶作飢饉状況がつづく。
1733	享保	18	●幕府、西日本の飢饉（享保飢饉）のため、信州で3万石の買い米を計る。 ●全国に疫病がはやり、幕府が薬法書を配布する。
1735	享保	20	●飯田藩、城下13町の火消し籏を定める。
1742	寛保	2	●戌の満水。千曲川水系で、台風の集中豪雨のため、空前の大水害がおこる。
1747	延享	4	●高井郡小布施・羅田村など14か村、防火共同体制を決めた火消し定書をつくる。
1750	寛延	3	●理兵衛堤防。伊那郡前沢村の松村理兵衛、天竜川築堤工事に着手する。
1751	宝暦	元	●善光寺平・越後に大地震。
1752	宝暦	2	●惣兵衛堤防。伊那郡下市田村の大川除石垣、飯田藩の御普請が行われ、石工頭惣兵衛の技術により完成する。
1754	宝暦	4	●浅間山噴火。

西暦	元号	年	おもな災害など
1773	安永	2	●高島藩、領内の舫要用米（備蓄米）制を定める。
1776	安永	5	●松本町大火（焼失1217軒）。大火後道幅をひろげる。
1782	天明	2	●この夏、冷害により各地で凶作が始まる（天明飢饉）。
1783	天明	3	●天明の浅間山大噴火 ●高井郡箕作村で大秋山・矢櫃の集落廃村。 ●飯田町大火（焼失208軒）
1784	天明	4	●善光寺大勧進等順、浅間大焼けを機に融通念仏血脈の授与を始める。
1786	天明	6	●信州各地で長雨・冷害により大凶作。
1788	天明	8	●信濃4代官、貯え夫食と最寄り組合村ごとの郷蔵建設を命じる。
1799	寛政	11	●幕府、神事祭礼・虫送りなどの芝居興行類を全面的に禁止する　信州幕・私領にも布達される。
1825	文政	8	●この夏・秋、多雨低温がつづきウンカも発生、凶作となる。
1833	天保	4	●長雨異常低温がつづき大凶作　天保飢饉が始まり、天保8年におよぶ。
1847	弘化	4	●善光寺地震。
1850	嘉永	3	●筑摩郡本洗馬村の蘭医熊谷珪碩、郷里で種痘を実施。
1854	安政	元	●安政東海・南海大地震　信濃各地にも被害が出る。
1858	安政	5	●コレラ大流行、村むらで厄病送りや祈祷をする。
1862	文久	2	●松本領村むら、藩の触れにより4日間コレラ退散の大祭、踊り・花火・狂言・相撲などを行う。
1869	明治	2	●この年、冷害により大凶作となり、米価が急騰する。
1886	明治	19	●北深志町大火（焼失999戸）。 ●飯山町大火（焼失660戸）。 ●コレラが県下に大流行。
1888	明治	21	●南深志町大火（焼失1600戸）。
1891	明治	24	●濃尾大地震。木曽・下伊那に被害。 ●松代大火（焼失749戸）。 ●長野町大火、善光寺仁王門・大本願・院坊も焼く。
1893	明治	26	●飯田町大火（焼失125戸）。
1894	明治	27	●政府、消防組規則公布。以後町村消防組が設置され、腕押しポンプが増える。 ●飯田町大火（焼失161戸）。
1896	明治	29	●千曲川・犀川・天竜川・木曽川水系に大水害。 ●赤痢が多発。
1897	明治	30	●赤痢大流行（死者8155人）。
1903	明治	36	●県下南北の諸河川が氾濫。
1904	明治	37	●南木曽岳蛇抜け（西筑摩郡吾妻村で集中豪雨により発生）。
1908	明治	41	●長野測候所、天気予報を始める。
1910	明治	43	●県下に豪雨・大水害。
1911	明治	44	●上下伊那・諏訪湖・姫川・千曲川などで洪水。 ●稗田山大崩落（北安曇郡南小谷村）。大雨により発生。 ●浅間山火山観測所開設（全国初）。
1912	大正	元	●松本市大火（焼失1464棟）。以後石油ランプが急速に減少し電灯が普及。
1913	大正	2	●西筑摩郡福島町大火（焼失106戸）。
1914	大正	3	●千曲川大洪水。三峰川、女鳥羽川、天竜川などの洪水。
1915	大正	4	●焼岳噴火。土石流が梓川をせきとめ大正池ができる。
1916	大正	5	●上高井郡保科村大火（焼失137戸）。 ●上伊那郡中箕輪村大火（焼失107戸）。
1918	大正	7	●大町地震。北安曇郡全域に被害。 ●県下の病死者数、スペイン風邪と肺炎その他の誘発をあわせ、前年比8500人増。
1919	大正	8	●上伊那郡伊那町大火（焼失144戸）。 ●下伊那郡飯田町大火（焼失304戸）。
1922	大正	11	●下伊那郡和田村大火（焼失120戸）。
1923	大正	12	●下伊那郡泰阜村で山火事。 ●集中豪雨による山崩れ（西筑摩郡大桑・読書両村）。 ●関東大震災。佐久・諏訪に被害。
1926	昭和	元	●更級郡共和村大火（焼失149戸）。
1927	昭和	2	●西筑摩郡福島村大火（焼失536戸）。
1934	昭和	9	●室戸台風。県下にも大被害。 ●県下大凶作。
1939	昭和	14	●風張山崩落（北安曇郡南小谷村横沢）。姫川をせきとめ、大糸線6か月間不通。 ●西筑摩郡上松町大火（被災240世帯）。
1940	昭和	15	●県下全域に大霜害、桑園被害。
1941	昭和	16	●千曲川堤防（内務省堤防）改修工事竣工（大正7～）。 ●長沼地震（長野市付近）。
1943	昭和	18	●西筑摩郡上松町大火（焼失210棟）。
1944	昭和	19	●東南海地震。諏訪地方で被害。
1945	昭和	20	●西筑摩郡上松町大火（被災180世帯） ●枕崎台風。果実・蕎麦・稲などに大被害。 ●埴科・西筑摩・東筑摩・南安曇・上伊那地方にチフスが大流行。 ●諏訪郡川岸村大火（焼失108棟）。

西暦	元号	年	おもな災害など
1946	昭和	21	●県下に発疹チフスが流行。 ●飯田市大火（焼失198戸）。 ●県下に赤痢が大流行。
1947	昭和	22	●飯田市大火（焼失4110戸）。市街の大半を焼失。 ●各地に寒波、45年ぶりに記録を書き換える大雪。 ●キャサリン台風、東信地方に被害。 ●県下に赤痢が大流行。 ●浅間山大爆発。
1948	昭和	23	●アイオン台風、県下各地に被害。
1949	昭和	24	●妙高焼山噴火　飯山地方に降灰。 ●浅間山大爆発。 ●キティ台風、県下各地に被害。 ●県下に集中豪雨が発生。
1950	昭和	25	●ヘリーン台風・ジェーン台風、県下各地に被害。 ●浅間山大爆発。
1951	昭和	26	●このころ県下各地に集団赤痢が頻発。 ●県下各地に日本脳炎が頻発。
1952	昭和	27	●飯山町大火（焼失139世帯）。
1953	昭和	28	●異常天候のため、7月から稲熱病発生。
1954	昭和	29	●台風12号、県下各地に被害。 ●台風14号、南信に被害。 ●寒波により、南佐久の特産カラ松苗に被害。
1956	昭和	31	●県下に寒波が襲来し、菜園・果樹・苗代などに被害。 ●台風15号、東・南信地方に被害。
1957	昭和	32	●伊那谷に梅雨前線による大雨災害が発生。 ●長野測候所が地方気象台に昇格する。
1958	昭和	33	●台風21号、県下各地に被害。 ●浅間山大爆発。
1959	昭和	34	●台風７号、県下各地に被害。 ●台風15号（伊勢湾台風）、県下各地に被害。
1960	昭和	35	●台風11号・12号、南信地方に被害。
1961	昭和	36	●栄村青倉で雪崩が発生し、家屋全壊、死者がでる。 ●三六災害が発生する。
1962	昭和	37	●焼岳大爆発。30年ぶりの爆発で松本平に降灰、泥流が梓川をせき止める。
1963	昭和	38	●伊那谷北部・南佐久地方に突風の被害。
1964	昭和	39	●新潟地震 。
1965	昭和	40	●阿南町大火（焼失56棟）。 ●松代群発地震。昭和42年まで続く。 ●台風23号、県下各地に被害。 ●台風24号、南信地方に被害。
1966	昭和	41	●大雨による災害（南木曽町）。
1967	昭和	42	●県北部に大雪。飯山線・主要地方道６路線が不通。 ●西穂高岳に集団登山中の松本深志高校生が落雷で死亡。
1968	昭和	43	●前線による豪雨・台風10号、県下各地に被害。
1969	昭和	44	●浅間山大爆発。 ●台風７号、県南部に被害。
1971	昭和	46	●小谷村大地すべり　姫川がせき止められ国道148号不通。 ●秋雨前線の大雨、県下各地に被害。
1974	昭和	49	●豪雪により孤立状態になった栄村秋山郷が救援を電話で陳情する。
1976	昭和	51	●県北部の記録的大雪、飯山線の列車ダイヤ大混乱。 ●小海線でヤスデが大発生、列車のスリップが続く。
1979	昭和	54	●御岳噴火　有史以来初めての噴火で、県下全域に降灰。
1980	昭和	55	●夏の低温・日照不足・長雨などの異常気象により、農作物に被害。
1981	昭和	56	●県下に記録的な大雪が降り、交通機関が大混乱する。 ●宇原川土石流災害（台風15号による）。
1982	昭和	57	●台風19号による大雨の被害が出る。 ●６月～９月の異常低温による冷害で、稲作不作。
1983	昭和	58	●台風10号による集中豪雨で、諏訪湖は15年ぶりに氾濫、千曲川が飯山市常盤地区左岸で決壊。
1984	昭和	59	●県北部に豪雪。 ●長野県西部地震。
1985	昭和	60	●県北部に豪雪。 ●地附山大地すべり（集中豪雨による）。
1991	平成	3	●台風18号災害。
1995	平成	7	●県北部に梅雨前線による豪雨。
1996	平成	8	●小谷村蒲原沢土石流災害。
1999	平成	11	●県下各地に豪雨。
2000	平成	12	●県下各地に豪雨。
2001	平成	13	●雪害（県下全域）。 ●台風15号、県下各地に被害。
2004	平成	16	●台風22号・23号災害。
2006	平成	18	●豪雨災害。

付録 Map 1 中世・近世の国土観と災害観



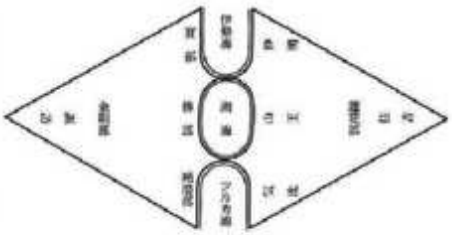
日本図（鎌倉時代後期　称名寺所蔵／神奈川県立金沢文庫保管）
中世の日本とそれを取り囲む龍。この図は列島の東（上）半分が欠けているが、中世人の国土観をあらわしている。

新板こよみ（寛文4年（1664）刊 国立国会図書館HPより）
「大日本国地震之図」と同じ構図だが、17世紀後半になると、龍にかわって鯰が日本を取り囲むようになる。これ以後、地震とは鯰が起こすものとの観念が定着していく。

大日本国地震之図（寛永元年(1624)刊 原田正彰氏蔵／岩波書店写真提供）
中世の系譜を引く図。上が東。独鈷の形と考えられた日本を龍（蛇）が囲んでいる。

独鈷（仏具）**の一例**
（国立歴史民俗博物館蔵）

『渓嵐拾葉集』所収の「日本図」
国土は独鈷の形をしているとされていた。伊勢海・伊勢神宮、敦賀海・気比社、琵琶湖・日吉山王社が列島の要所を占める。



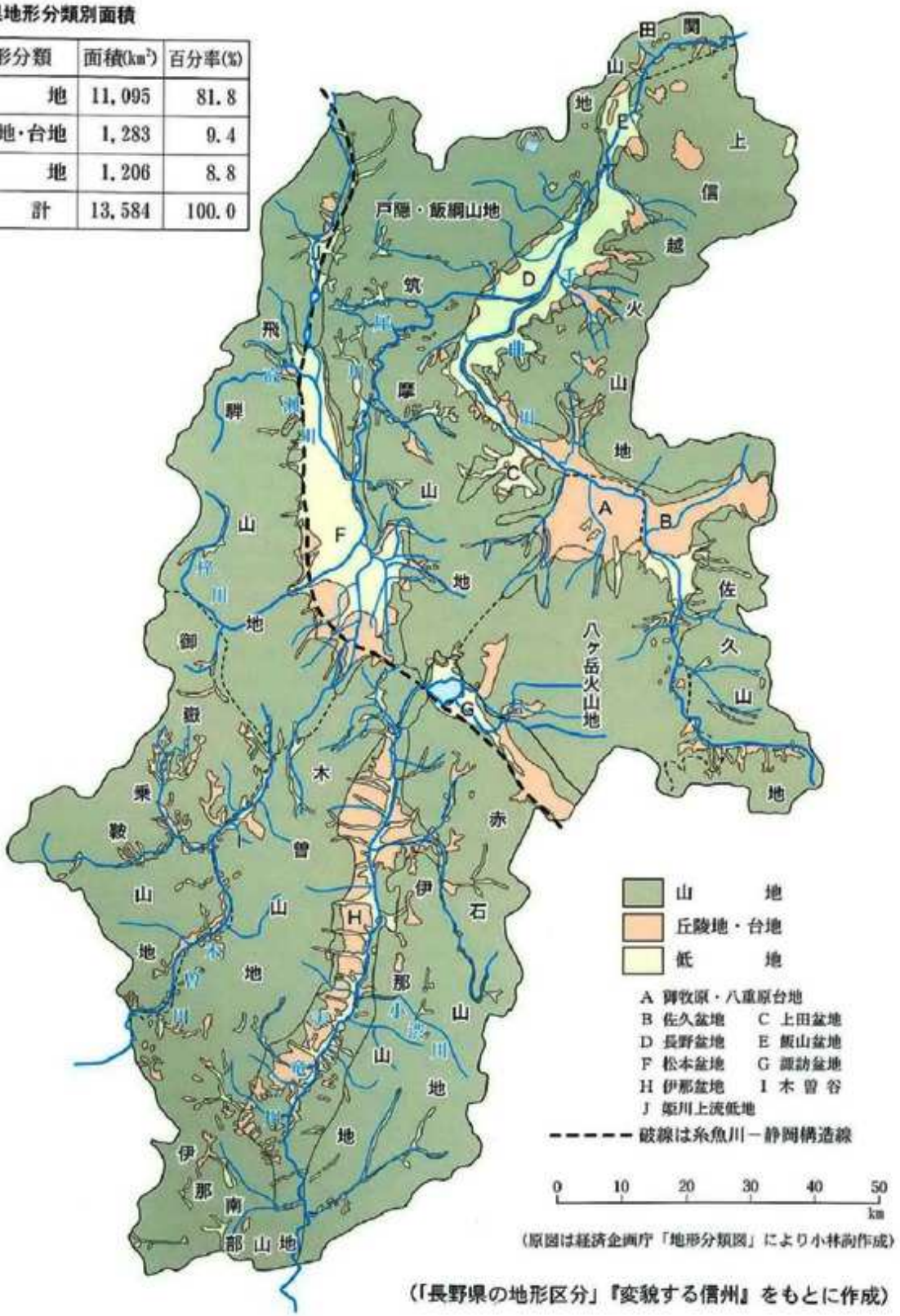
『渓嵐拾葉集』所収の「日本図」
伊勢海・伊勢神宮、敦賀海・気比社、琵琶湖・日吉山王社のほか、それを境に、東が金剛部・諏訪社、西が蓮華部・住吉社とされている。信濃の諏訪社が「国土」構成する要素となっている点が注目される。

中世の人びとは、日本の国土は密教の法具である独鈷（鈷杵）の形をしていて、国土は神である龍（蛇）に守られ、またその支配のもとにあるという仏教的な考えかたをしていました。さかんにおこった地震や噴火などの災害も龍＝神の意志と考えていました。近世になると、鯰が地震のみなもととする観念が生まれました。（福島正樹）

付録 Map 2 長野県の地形

長野県地形分類別面積

地形分類	面積(km²)	百分率(%)
山　　地	11,095	81.8
丘陵地・台地	1,283	9.4
低　　地	1,206	8.8
合　　計	13,584	100.0



（原図は経済企画庁「地形分類図」により小林尚作成）

（「長野県の地形区分」『変貌する信州』をもとに作成）

付録 主要参考文献（発行年順）

著者・編者	文献名	発行者	発行年
飯田市	『都市計画より見た復興飯田市の表情』	飯田市	1950
飯田市	『防火都市飯田』	飯田市	1952
飯田市土木課	『飯田都市計画概要』	飯田市	1954
栄村史水内編纂委員会	『栄村史　水内編』	下水内郡栄村	1960
長野県企業局電気部	『三峰川総合開発史』	長野県企業局電気部	1961
栄村史堺編纂委員会	『栄村史　堺編』	下水内郡栄村	1964
信濃毎日新聞社	『松代地震』	信濃毎日新聞社	1966
長野県総務部消防防災課	『松代群発地震の記録』	長野県	1969
高森町史編纂委員会	『高森町史　上巻　後編』	高森町史刊行会	1972
長野県教育委員会 下水内郡栄村教育委員会	『栄村の民俗　第一集　冬と生活　志久見地域調査報告』	長野県教育委員会 下水内郡栄村教育委員会	1972
信州地理科学研究会	『変貌する信州』	信濃教育会出版部	1973
小川村誌編纂委員会	『小川村誌』	小川村	1975
建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所	『信濃川百年史』	北陸建設弘済会	1979
坂城町誌刊行会	『坂城町誌　中巻　歴史編（一）』	坂城町誌刊行会	1981
古島敏雄　編	『農書の時代』	農山漁村文化協会	1981
大鹿村誌編纂委員会	『大鹿村誌　中巻・下巻』	大鹿村誌刊行委員会	1984
小林計一郎　監修	『地震後世俗語之種　善光寺大地震図会』	銀河書房	1985
長野県生活環境部消防防災課	『長野県西部地震の記録』	長野県	1985
長野県西部地震の記録編さん委員会	『まさか王滝に！　長野県西部地震の記録』	王滝村長　家高卓郎	1986
長野県歴史大年表刊行会	『長野県歴史大年表　上巻・下巻』	株式会社　郷土出版社	1987
阿南町町誌編纂委員会	『阿南町誌　下巻』	阿南町	1987
諏訪市史編纂委員会	『諏訪市史　中巻　近世』	諏訪市	1988
宗田　一	『図説　日本医療文化史』	思文閣出版	1989
地附山地すべり記録誌編集委員会	『復旧への足跡―地附山地すべり対策事業の記録―』	長野県長野建設事務所	1989
上田市立信濃国分寺資料館	『蘇民将来信符―その信仰と伝承―』	上田市立信濃国分寺資料館	1989
松島信幸・亀田武巳・村松　武	『伊那谷の土石流と湧水』	伊那谷自然友の会 飯田市美術博物館	1991
奥田　穣	『昭和36年伊那谷大水害の気象』	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	1991
長野県	『長野県史　通史編　別巻年表・索引　年表』	長野県史刊行会	1992
群馬県	『群馬県史　通史編　6　近世3』	群馬県	1992
建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所	『千曲川』	財団法人河川情報センター	1993
和田清（著者・監修）	『上高地自然観察ノート』	ほおずき書籍株式会社	1993
長野市地附山地すべり災害誌編さん委員会	『真夏の大崩落　長野市地附山地すべり災害の記録』	長野市	1993
町田　洋・新井房夫	『火山灰アトラス』	東京大学出版会	1994
群馬県立歴史博物館	『天明の浅間焼け』	群馬県立歴史博物館	1995
飯田・下伊那の歴史編集委員会	『図説　飯田・下伊那の歴史＜上巻＞』	郷土出版社	1995
飯山市誌編纂専門委員会	『飯山市誌　歴史編（下）』	飯山市　飯山市誌編纂委員会	1995
松本市	『松本市誌　第二巻　歴史編Ⅱ近世』	松本市	1995
小林計一郎　監修	『図説　北信濃の歴史　上』	郷土出版	1995
御代田町	『御代田町誌　自然編』	御代田町	1995
下伊那20世紀年表刊行会	『下伊那20世紀年表』	下伊那20世紀年表刊行会	1996
飯島町誌編纂刊行委員会	『飯島町誌　中巻　中世近世編』	飯島町	1996
青木歳幸	『在村蘭学の研究』	思文閣出版	1996
長野県立歴史館	『信濃の風土と歴史2　原始時代のシナノ』	長野県立歴史館	1996
松本市教育委員会	『松本城下町跡　伊勢町』	松本市教育委員会	1996

著者・編者	文　献　名	発　行　者	発行年
塩川友衛	『資料で見る郷の歴史　江戸時代の小諸藩』	塩川友衛	1997
長野県埋蔵文化財センター	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡』	長野県埋蔵文化財センター	1997
松代藩文化施設管理事務所	『平成10年度企画展　震災後 一五〇年善光寺地震一松代藩の被害と対応一』	松代藩文化施設管理事務所	1998
長野県埋蔵文化財センター	『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書１』	長野県埋蔵文化財センター	1998
長野県埋蔵文化財センター	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群一古代１編一』	長野県埋蔵文化財センター	1999
戸倉町誌編纂委員会	『戸倉町誌　第二巻　歴史編　上』	戸倉町誌刊行会	1999
長野県佐久建設事務所	『浅間山の火山災害と防災』	長野県佐久建設事務所	1999
長野県埋蔵文化財センター	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５ 松原遺跡一弥生・総論１一』	長野県埋蔵文化財センター	2000
長野県埋蔵文化財センター	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27　更埴条里遺跡・屋代遺跡群一古代２・中世・近世編一本文』	長野県埋蔵文化財センター	2000
高橋正樹・小林哲夫　編	『フィールドガイド日本の火山⑥中部・近畿・中国の火山』	築地書館	2000
平野敬右ほか	『環境・災害・事故の事典』	丸善株式会社	2001
峰岸純夫	『中世　災害・戦乱の社会史』	吉川弘文館	2001
磯貝富士男	『中世の農業と気候一水田二毛作の展開一』	吉川弘文館	2002
信濃毎日新聞社出版局	『「戒の満水」を歩く』	信濃毎日新聞社	2002
石川正臣　監修	『保存版　飯田・下伊那の今昔』	郷土出版社	2002
国土交通省北陸地方整備局松本砂防工事事務所	『釜ヶ渕堰堤一登録有形文化財一』	国土交通省北陸地方整備局松本砂防工事事務所	2002
寺内隆夫	「９世紀後半の洪水災害と復興への道のり一屋代遺跡群・更埴条里遺跡の発掘調査から一」『信濃』第54巻第８号	信濃史学会	2002
市川健夫　他	『千曲川』	郷土出版社	2003
高橋彦芳	『田舎村長人生記一栄村の四季とともに一』	本の泉社	2003
黒田日出男	『龍の棲む日本』	岩波書店	2003
黒耀石体験ミュージアム	『黒耀石の原産地を探る一鷹山遺跡群一』	新泉社	2004
堤　隆	『浅間嶽大焼』	浅間縄文ミュージアム	2004
長野県埋蔵文化財センター	『一般国道18号（野尻バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書２　貫ノ木遺跡・照月台遺跡』	長野県埋蔵文化財センター	2004
かみつけの里博物館	『1109一浅間山噴火一中世への胎動』	かみつけの里博物館	2004
長野市誌編さん委員会	『長野市誌　第４巻　歴史編　近世Ⅱ』	長野市	2004
松本城下町歴史研究会	『よみがえる城下町・松本一息づく町人たちのくらし』	郷土出版社	2004
千曲川・犀川治水史研究会	『千曲川　石にきざまれた願い』	信濃毎日新聞社	2005
長野市制100周年記念事業綿内地区実行委員会	『ふるさとの誇り　綿内誌』	長野市制100周年記念事業綿内地区実行委員会	2005
長野県危機管理局	『長野県防災ハンドブック』	長野県危機管理局	2006
長野県土木部	『梅雨前線豪雨災害速報』	長野県土木部	2006
中川村誌編纂刊行委員会	『中川村誌　中巻』	中川村	2006
寺岡義治・松島信幸・村松 武	『遠山川の埋没林一古代の地変を未来の警鐘に一』	南信濃自治振興センター飯田市美術博物館	2006
天竜川上流河川事務所	『大西山崩壊写真と大鹿村の復興』	天竜川上流河川事務所	2006
新村 拓　編	『日本医療史』	吉川弘文館	2006
下伊那教育会	『下伊那史　第八巻』	下伊那史編纂会	2006
ＮＨＫ取材班	『気候大異変』	ＮＨＫ出版	2006
飯田市教育委員会	『わたしたちの飯田市（３、４年社会科資料）』	飯田市教育委員会	2007
伊那史学会	『伊那　2007年３月号（飯田大火特集）』	伊那史学会	2007
降幡浩樹	「善光寺地震の災害情報一読売・摺物を中心に一」『市誌研究ながの』第14号	長野市	2007
奈良文化財研究所	「遠江地震と長野県遠山川埋没林」『埋蔵文化財ニュース128』	奈良文化財研究所	2007

協力者・協力機関（50音順）

浅野井 坦

浅間縄文ミュージアム

飯田市教育委員会

飯田市立中央図書館

市澤英利

岩波書店

雲仙岳災害記念館

大熊政彦

大鹿村中央構造線博物館

大鹿村役場商工観光係

王滝村役場

大谷 昌

大山田神社（下條村）

加藤みゆき

神奈川県立金沢文庫

環境省大臣官房政策評価広報課広報室

気象庁広報部

気象庁長野地方観測所

北野天満宮

旧富士見高原療養所資料館

京都国立博物館

協同測量社

京都大学地球物理学教室

国土交通省北陸地方整備局
千曲川河川事務所

国土交通省北陸地方整備局
松本砂防事務所

国土交通省中部地方整備局
天竜川上流河川事務所

国立国会図書館

国立歴史民俗博物館

栄村役場

坂部弘雄

坂本邦夫

佐々木 克

真田宝物館

塩川友衛

自然公園財団　上高地支部

信濃国分寺資料館

信濃毎日新聞社

称名寺

信毎フォトサービス

諏訪市教育委員会

関口行弘

茅野市八ヶ岳総合博物館

堤 隆

蟬恋郷土資料館

出口屋

天竜川総合学習館 かわらんぺ

東京国立博物館

東京大学史料編纂所

東京電力株式会社　松本電力所

長野県環境保全協会

長野県危機管理局危機管理防災課

長野県佐久建設事務所

長野県土木部土木政策課・砂防課

長野県長野建設事務所

長野県農政部農業政策課

長野県埋蔵文化財センター

長野市危機管理防災課

長和町教育委員会

橋本玄樹

樋口正幸

福島県大沼郡会津美里町教育委員会

ほおずき書籍株式会社

松島信幸

松本市教育委員会

丸山憲一

美斉津洋夫

三宅康幸

祢津宗伸

蓮台寺

あ と が き

この本を読んで、もっと知りたいことが出てきたら、ぜひ県立歴史館へ来てください。収蔵しているたくさんの資料や、書籍を見ることができます。

また、歴史を専門に研究している職員がいるので、わからないこと、調べたいことがあれば、職員に質問してください。疑問の解決の方法や資料の調べ方を丁寧（ていねい）にお答えします。

最後になりましたが、本書のために貴重な資料や写真などを快くご提供くださった多くの方がたに厚くお礼を申し上げます。

2008年3月

長野県立歴史館

執筆者・編集者（50音順）

吾妻忠彦	篠田忠彦	成竹精一	宮下健司
大竹憲昭	滝澤正幸	原　明芳	村石正行
大橋昌人	館林弘毅	平野　誠	森山俊一
岸田恵理	谷　和隆	福島正樹	
黒岩龍也	傳田伊史	前澤　健	
児玉卓文	長井丈夫	水沢教子	

利 用 案 内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休 館 日　毎週月曜日（祝日、振替休日にあたるときは火曜日）と祝日の翌日
年末年始、その他館長が定める日

常設展観覧料　一般300円（200円）、高・大学生150円（100円）、小・中学生70円（50円）／（　）内は団体20名以上
次に該当する場合は観覧料が無料になります。
・小・中・高・自律学校生が土曜日、日曜日、国民の祝日および振替休日に観覧するとき。
・身体障害者手帳など交付を受けている方と介護の方が観覧するとき。
・県内の小・中・高校生が学校の教育活動として観覧するとき。この場合申請が必要ですが、申請書類は当館ホームページでも手に入れることができます。

交 通 案 内　しなの鉄道屋代駅から徒歩25分、屋代高校前駅から徒歩25分
長野電鉄屋代線東屋代駅から徒歩20分
長野自動車道更埴ICから車5分
高速道路バス「上信越道 屋代」から徒歩5分

長野県立歴史館

信濃の風土と歴史⑭

災 わざわい　人びとのくらしと災害

2008年（平成20）3月24日発行

編集・発行　長野県立歴史館
〒387-0007　長野県千曲市大字屋代字清水260-6
電　話　026-274-2000（代）
F A X　026-274-3996
ホームページ　http://www.npmh.net
印　刷　株式会社プラルト
〒399-0033　長野県松本市大字笹賀5985

092
Sh 59
14